

啄木のふるさと『もりおかの短歌』

第十七回年間最優秀賞決定!

啄木のふるさと「もりおかの短歌」事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である「三行書き」の短歌づくりを通して「短歌のまち もりおか」を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。
四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった三五七首（一般部門）の中から第十七回目となる年間優秀作品が決定いたしました。
今年も多くのご投稿をいただきありがとうございました。書面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（一首）

もりおかの
さんさ踊りの太鼓の音
頭上の栃の木の葉震わす

盛岡市 鈴木 充

【受賞者からのコメント】

えつ、私が第十七回もりおかの短歌年間最優秀賞でいいんですか？と正直思いますが、賞はうれし限り。年を取り涙もろくなつて、盛岡さんさ踊りの開始時、太鼓の音が腹に響くと目頭がジーンと熱くなります。

【審査員講評】

（山本豊）さんさ踊りの勇壮な太鼓の響きが、栃の木の葉までも震わす、という把握が歌に深みと情感を加えている。短歌は事柄を詰め込み過ぎるのは良くないが、単調な描写も味わいに欠ける。作者は歌に何を加えればよいかを心得ている。最優秀賞に相応しい作品である。
（外館）「栃」を詠み込んだのが良い、と思えます。盛岡の夏の歌といえば、さんさ踊りが数多く詠まれます。多く詠まれる題材ながら、この歌が抜き出たのは、栃が印象的だからです。「の」の反復も、聴覚と視覚に効果的です。
（山本玲子）岩手県庁前の頭上を覆いつくすような栃の木。路上には身を乗り出した人々の熱気の中、踏みつぶされた栃の葉。太鼓の音、掛け声、サワサワと揺れる葉。あ、私はすでに夏の盛岡に引き込まれてしまった。
（吉田）これまでさんさ踊りを詠んだ作品はたくさんありましたが、この作品は県庁前通りの栃の木に注目したところに特徴があります。華やかな衣装をまとった踊り手とともに頭上の栃の木もさんさ踊りに参加しているのですね。力強さが感じられる優れた作品です。

年間優秀賞（二首）

鈴の音も蹄もかるき若駒の
背にて眠りし
幼愛らし

青森県青森市 鈴木 操

【受賞者からのコメント】

町内の世話役だった頃、閉じ籠もりがちなお姉様達を誘い、町内の交差点と館坂橋の中間辺りで馬の行列を観たものです。鬼籍に入られた方々を偲びつつ、今なお耳と目と心に刻まれている事を詠みました。感謝!!です。

【審査員講評】

（山本豊）チャグチャグ馬コは、滝沢市の春前神社から盛岡八幡宮までの約十四キロを行進する。笑顔で観客に手を振っていた馬上の幼い子供もいつしか眠ってしまったが、その姿がまた愛らしい。ただこの内容の歌は多くの方が作っている。視点や余韻考える必要がある。
（外館）チャグチャグ馬コで、見かける場面です。可愛く、少し心配にもなります。眠っている「幼」児と軽やかに歩んでいる「若駒」との共鳴が感じられる歌です。四句末と結句末の「し」とは、韻を踏んでいるのでしょうか。
（山本玲子）最初は馬の背から手を振って沿道の人々に応えていたのに、盛岡の初夏の風心地よい揺れ、シャンシャンと鈴の音にはどうしても勝てない。若駒も眠ってしまった幼子に気づかないふりをしてあげているのかもしれない。
（吉田）チャグチャグ馬コの背には朝からの疲れでしょうか、心地よい揺れのせいでしょうか、幼子が眠っている姿が見られることがあります。その微笑ましい姿を作者は愛情のある眼差しで捉えました。若駒もまたこの歌の主役です。情景が浮かんでくるようです。

春の風吹いて賑わう街中に
食欲満たす
盛岡よ市

盛岡市 河野 康夫

【受賞者からのコメント】

盛岡の長い冬も終わり春が訪れて街中に足取りも軽やかに人々が行き交う。春の食欲を満たす旬の食材、訛り飛び交う材木町のよ市の賑わいを詠んでみました。思いがけない賞を頂きありがとうございます。

【審査員講評】

（山本豊）材木町のよ市はビールなども飲めるようにになり、大勢の人で賑わうようになった。ビールを飲みつつつまみを食べながら食欲を満たすことは至福の時だ。言外に、終りの見えない戦で苦しむ人々が大勢いることを思わせてくれる。
（外館）材木町のよ市でしょうか。その開催を待っていた気持ちに共感できる歌でした。冬の間、外出を控えても、春風が吹いて、新しい季節が来れば、動きたくくなります。当然、空腹になり、それを満たす場もにぎわうわけです。
（山本玲子）専ら個人的なコメントになってしまいが、よ市が行われる材木町は父の実家があった場所。もうすっかりこの土地に定着して賑わいを見せてくれて、このことが素直にうれしい。今度久しぶりに行ってみたいかと思う。
（吉田）雪が溶けて春風が吹くようになる。とそろそろよ市が始まる頃だと待ち遠しい気持ちになります。楽しみはなんと言っても屋台で作られる食べ物や提供される飲み物。みんな笑顔で歩いていきます。そのよ市の雰囲気リズムよく歌い上げました。

年間奨励賞（二首）

寒波来て積りし雪は固けれど
「雪あかり」の灯
心も解かす

盛岡市 堀米 公子

【受賞者からのコメント】

最近温暖化によるものが雪が少なくなつて。六十数年前、受験で伊達藩から当地に来た時は、バスが止まる程で、それ以来、早朝から時報の鳴るまで掻き続けました。啄木の「雪」の歌が好きで少なくなつた雪の歌が恋しいです。

【審査員講評】

（山本豊）「雪あかり」の灯の明るさは、控え目でありながら心を温めてくれるものがある。作者も自然に心が解けてゆく感じになつたのでは。雪国で生活することは、自然の厳

年明けて
凍ばれる朝に杖ついて
通い出したり神子田の朝市に

盛岡市 赤坂 昌信

【受賞者からのコメント】

賞をいただけることは何回あつても嬉しい事。今回の一首はいつも出かける朝市を詠んだもの。前にも朝市を詠んだことがあつたので期待していなかったけど受賞し嬉しさ倍増しました。今後も短歌作りを続けたいと思います。

【審査員講評】

（山本豊）作者は杖をつかなければならぬほど足腰が弱っているかもしれないが、神子田の朝市に行きたい気持ちを抑えることができない。朝市の営業開始は朝五時なの

しさを思い知らされるが多くあるが、このような情景を味わうことの幸せもある。
（外館）一月上旬に開催される「雪あかり」の行事が詠まれています。近年は、数年に一度といわれる最強の寒波がたびたび襲来しています。しかし、この行事を送ると、固い雪も融け、人の心も解けて、こぼりがなくなります。
（山本玲子）「雪あかり」は盛岡の行事として定着しているが、ほんやり灯る火は古の民家の明かりにも似ているから好まれない。寒ければ寒いほど、暖炉を囲みながら時を越えて心の交流が生まれる。
（吉田）寒波が訪れて積もつた雪はそのままだ固く凍つてしまいましたが、さすが、たくさんの人が感謝や祈りの気持ちをこめて持ち寄つた雪あかりの灯は雪ばかりでなく見る人の心も温かく解かします。雪とろろそくの灯は相性のよいものですね。情景が目には浮かびます。

で、かなり厳しい寒さではあるが、行きたい気持ちが勝る。このような気持ちに学ぶことが多い。
（外館）神子田の朝市は、昔から変わらぬ人々の交流があるようです。テレビで見えさそう感じますから、実際に行けば、なおさらでしょう。だから、新年の早朝、しばらくの寒さに耐え、杖をついてでも、かよいたくなるのです。
（山本玲子）楽しいことだらけなら、凍てつく風が吹いたって、少々不自由になった身体でも、心軽やかに、少々不自由になった神子田の朝市がこれほど魅力的だったなら、一度は行ってみたいと思わせてくれる。
（吉田）作者は一年を通して神子田の朝市に通っている人なのでしょう。寒いからといって休むわけにはいきません。地元のおいしいものを求めて多くの人で賑わう朝市。年が改まって朝市に行くというのはこの一年の健康を願う気持ちがあるからですね。